

食の安全 「基本のお話」

第69回

除草剤グリホサート



食パンから発がん物質グリホサート検出
という※発表を知り衝撃でした。

※女性自身 農民連ニュース

1. グリホサートは、農業、家庭菜園に世界でも広く使用されている除草剤です。

2. グリホサートは、残留基準内であれば、人の健康へのリスクは心配しなくてもよいとされています。

発表されている検出値は最大0.23 ppmで、
国の基準値の100分の1以下でした。

3. グリホサート騒動

きっかけは、2015年、国際がん研究機関（IARC）が、グリホサートを「おそらく発がん性あり」のグループ2A※に分類したことです。
グリホサートは遺伝子組換え作物開発のトップ企業の製品だったために、大きな騒動になりました。

この時、IARCが、同様にグループ2Aに

ランク付けたダイアジノンとマラチオン（どちらも有機リン系殺虫剤）はまったく話題になりませんでした。

※IARCは、発がん性を「根拠の強さ」で5段階に分類しています。

グループ1：十分な証拠あり
グループ2A・2B：可能性あり
グループ3：わからない
グループ4：ない

4. 食品のリスク評価機関は「人の健康へのリスクなし」と判断

この騒動を受けて、世界保健機関と国連食糧農業機関の合同残留農薬専門家会議（JMPR）は、IARCが発がん性の根拠とした全論文・報告書を含めて詳細に審査し、グリホサート、ダイアジノン、マラチオンの3つの農薬とも、作物残留を通しての人の健康へのリスク（発がん性、遺伝毒性）はないと判断しています。

日本の食品安全委員会も2016年に「神経毒性、発がん性、繁殖能力に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかった」と結論付けています。欧州や米国、カナダ、ニュージーランド等の食品のリスク評価機関も同様の見解を示しています。

5. ハザードの特定とリスク分析の違い

IARCが行ったのは、「ハザード（どんな危害があるか）」の特定です。

一方、JMPRや食品安全委員会等リスク評価機関が行ったのは、「ヒトに対する実際のリスクの評価」です。摂取する量によってリスク度は異なります。

例、お酒（アルコール飲料）は発がん物質（「ヒトに対する発がん性あり」のグループ1）です。飲みすぎると健康を害するおそれがありますが、適量であれば逆に体には良いとされています。お酒の場合、ハザードは「発がん性あり」で、リスク評価は「少量では、健康への懸念は生じない」になります。

週刊誌やインターネット上の記事には、意図的に読者に不安を与えようとするモノもあります。科学的知見に基づいた正確な情報であるかを確認することが大切です。

